

こまげたおせん



登場人物

ナレーター

おせん

善^{ぜん}さん

八^やつあん

地^じ蔵^{ぞう}さま

吉^{きち}兵^べ衛^え

源^{げん}さん

娘^{むすめ}

1



2



3



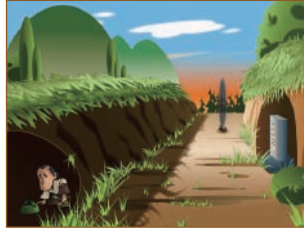
4



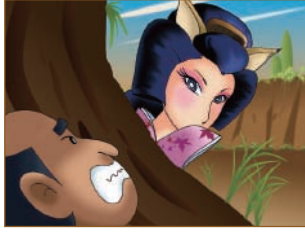
5



6



7



8



9



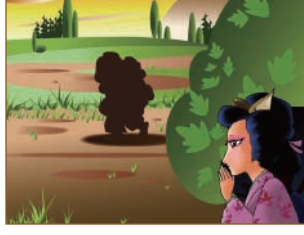
10



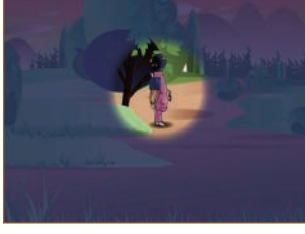
11



12



13



14





むかし、吉岡よしおかに、村人から「おせんぎつね」と呼ばれる一匹の狐きつねが住すんでいました。

ある日、臆病者おくびょうものの善さんぜんは、親戚しんせきの婚礼こんれいに招まねかれた帰り道、首ひに引ひき出物でもののごちそうをしぼりつけ、暗くくなった道を急いそぎました。弁べん天塚てんづかのところまで来ると、道ばたに大きな傘かさがさしてあって、その下したにお地藏じぞうさまが立たっていました。

善さん 「あれゝこんなところにお地藏じぞうさまがあつたつけかなあ？」

善さんが不思議ふしぎそうに覗のぞくと、

地藏じぞうさま 「あつた、あつた。ごちそう置いてけゝ」

と言いいました。

善さん 「わあくお地藏じぞうさまがしゃべった！」

善さんぜんはあわてて、首くびにしぼりつけていたごちそうをお地藏じぞうさまにそなえました。

とその時、お地藏じぞうさまがぺろりと舌したを出したのです。

善さん 「ハハア―これはおせんぎつねのいたずらだな」



善さん

と善さんは気がつきました。

「人間に悪さをするなんて勘弁できねえ！」

善さんはお地藏さまに飛びかかり、思いつき叩くと、

善さん

「イテテテテ・・・」

叩いても、叩いても痛いのは善さんの手でした。

善さん

「イテテテテ・・・こりやかなわん」

善さんはほうほうの体で逃げ帰り、近くの八つあんの家に駆け込みました。

善さん

「み、水をくれ〜今、葛原からけーんべえと思つて弁天塚の手前
来んと、でつけえ傘があつてよくその下にお地藏さまに化けたお
せんぎつねがいてひでえ目にあつた。んで、ごちそうみんな取られ
ちまったあよ」

八つあん

「おせんぎつねだと。ようし、行って見て来んべえ」

吉兵衛

「じゃあ、おらも行ったんべえ」

と、ちようど居合わせた本家の吉兵衛さんと一緒に提灯をさげて急いで行ってみました。



すると、傘と見えたのは八つあんの家で、野良弁当をつかう時の日よけの桑の木でした。そのサゼエがら(注1)に善さんの風呂敷が引つかかって、ごちそうがあつちこつちに散らばっていました。

八つあん 「こりやすげえなく善さんはサゼエがらとけんかしたんだあゝ
「こんにゃあ血だらけになんのもしようがねえなあ。アハハハハ」

吉兵衛 「まったくだあゝアハハハハ」

八・吉 「アハハハハ」

それからしばらくして、今度は村の源さんがお使いの帰り道、さいぼう塚の近くを通りかかると、後ろから「カラコロ、カラコロ」と下駄の音がするので、振り向くとだあれもいません。歩き出すとまた「カラコロ、カラコロ」ついてきます。

源さん 「気味わりいなあ。誰だか知らんが先に行かせちまえ」

源さん 「ここです待ってりや安心だ。なんも恐くねえぞ」



おせん

源さん

吉兵衛

源さん

吉兵衛

ところが、穴の上から見たこともない器量のよい娘が、
「フフフフフ……」

と覗き込んだので、びつくり仰天。
「わーっ！」

とばかりに一目散に逃げて吉兵衛さんの家に逃げ込みました。

「どうしたんだい、源さん」

「おせんぎつねにおどかさされたあ」

源さんはヘナヘナと座り込んでしまいました。

「また、おせんぎつねか。困ったもんだ。なんとかしなきゃなんねえなあ」

いつも昼のうちに町へ買い物に行っていた吉兵衛さんは、ある日の夕方、油揚げを三枚持つてるあん橋を渡り、さいぼう塚に出ました。

するとやっぱり「カラコロ、カラコロ」と下駄の音がします。吉



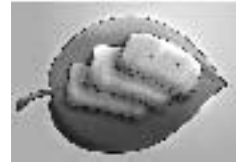
娘

「困ったわあ。どうしましょう」

吉兵衛 娘

しばらくして、吉兵衛さんは仲人なこうどを頼まれ、近所の娘さんを隣村となりむらまで連れていっての帰り道、さいぼう塚づかの近くまで来たところ、
「あれ、下駄げたの鼻緒はなおが切れました」
「よしよし、私が鼻緒をすげかえてあげよう」

吉兵衛さんは腰こしの手ぬぐいを裂さいてすげかえようとしたが、
なかなかうまくできません。



吉兵衛

兵衛さんが振り返ると、下駄をはいたきれいな娘が立っていました。
「おせんや、もういたずらはおよし。おまえも独ひとりぼちでさみしいんだろな。これからは、私が時々おいしい油揚げあぶらあを買ってきてあげるから、もう悪わるさはおやめ」
そう言って吉兵衛さんが、大きな葉っぱの上に油揚げを乗せると、
娘はふつと姿を消してしまいました。
それから、おせんの駒下駄こまげたの音は聞かれなくなりました。



吉兵衛

「そうだ、こうしよう。ヨイシヨ」と、吉兵衛さんは娘さんをおんぶしたのです。

娘 「ありがとうございます」

恥はずかしそうな娘さんをおぶって、優やさしい吉兵衛さんは悠ゆう々と歩ゆいていきました。それを木の蔭かげから、おせんぎつねがうらやましそ
うに見ていました。

次の日から夕方になると、さいぼう塚づかのそばでひとりの美しい娘
が、鼻緒はなおの切れた駒下駄こまげたを持って困っている姿が見られるようにな
りました。

おせんぎつねでした。

おせん 「こうしていたら吉兵衛さんが来て、あの娘のようにおんぶしてく
れないかしら」

おせんぎつねは、優やさしい吉兵衛さんを好きになつてしまつたよう
です。

「現^{うつ}し身^みの 我^{われ}は狐^{きつね}よ 恋^{こい}しくも

カラン

思^{おも}いを秘^ひめて ただ泣^なくばかり」

注1 サゼエがら・・・切った桑の木が枯れたもの